

# 黒川の今昔

この「黒川の今昔」では、黒川で幼少期を過ごされた水口元義さん（S.3 生まれ）、美濃岡進さん（S.5 生まれ）、畑重雄さん（S.11 生まれ）、北野正さん（S.11 生まれ）、今西初子さん（S.16 生まれ）、水口清さん（S.17 生まれ）、西富正隆さん（S.25 生まれ）からインタビューしてお伺いできた内容をもとに記載しています。

## 1. 昭和30年代までの生業

自然豊かな黒川の集落では、かねてより林業と農業そして近隣の鉱山での労働を主として、多くの家々が生計を立ててきました。また、茶道で用いられる高級木炭「池田炭」の産地として名高く、冬場は炭の原料となるクヌギの伐採を地域で協力し、炭焼きを行ってきたことが大きな特徴です。

### 四季に合わせた生業のスタイル

黒川がかつて多く見られた炭焼き農家。今も残るこの特徴的な暮らしの一年間のサイクルは、

【冬】クヌギの伐採～炭焼き   【春】田植え、作付け  
【夏】クヌギ林の下草刈り   【秋】田畑の作物を収穫  
という繰り返しだったといえます。

### 炭焼きの主な流れ

山間部の谷間、耕作面積の少ない黒川では、農業の閑散期を利用し、山の木を炭にして商品としてきたことが大きな特徴でした。かつては山中に炭窯が数多く存在し、伐採されたクヌギは山中で炭にされ、平地まで背負って運ばれてきます。これを池田方面から仲買人が買い付けに来ていたそうです。

一連の作業は重労働で、それぞれの家庭では子どもも含め一家総出で炭焼きに精を出していました。村の共有林として存在していたクヌギ林は、毎年秋に入札で伐採の権利を決定していました。紅葉が始まる頃、9月23日の願祭の日にその年の伐採の権利の行き先が決定し、翌年の5月8日まで伐採できる期間が続きます。

1950年代半ば（昭和30年代）頃の燃料革命により石油・ガス・電気が使用されるようになったことで炭焼き農家は徐々に減少し、池田を始めとする大阪方面へサラリーマンとして働きに出る人々も増えました。

### 田んぼ仕事

昭和初期の黒川では牛を使った農耕も行われており、黒川の人たちが「馬喰さん」と呼んでいた牛の仲介商人を通じて成牛になるまで黒川の村で使われ、その後は肉牛となるべく再び売却されていったといえます。1950年代半ば（昭和30年代）になると農具の機械化が導入されてきました。

また、昭和初期に妙見山への参拝者が多い頃には、この辺りで収穫された野菜の多くが「黒川の銀座(P.31 参照)」の旅館に買い取られていたそうです。

### きんま 木馬

炭焼きの原材料となる山で伐採したクヌギを、人や牛などが牽引して運搬するために使われていた、「木馬」。140cm～160cmほどの大きさにもなる道具です。こういったソリのような道具は日本各地の山々で見られたそうですが、黒川では精錬するため鉱石を鉱山から運び出す際にも、この道具が使われていたそうです。（黒川在住美濃岡進さん所有）



写真 28. 当時の農家



写真 29. 妙見の森に残る炭窯跡



写真 30. 当時の風景



写真 31. 鉱山トロッコのレール

### かつほしこうざん 勝星鉱山

京都府の亀岡から兵庫県の但馬にいたるまで、北摂周辺は鉱山が多く存在するエリアです。この川西市黒川にも「勝星鉱山」という銅鉱山があり、第二次世界大戦の終わりまで稼働していました。また黒川にはもうひとつ「大谷鉱山」という鉱山もあったそうです（※京都府亀岡に存在した大谷鉱山とは別物です）。

### 鉱山労働

黒川の人々と鉱山の関係は江戸時代頃から見受けられます（P.26 参照）。農業や炭焼きと並行して、この地域では鉱業に関わる人が多かったようです。現在も黒川に暮らし、1940年（昭和15年）頃の戦中期、黒川の「勝星鉱山」で働いていた経験を持つ水口さんのお話からも、第二次世界大戦前から戦後まで人々が新しく鉱山を掘り、働いていた様子が伺えます。

終戦を迎えるまで鉄が重工業に大量に必要とされていたこともあり、鉱物にまつわる産業の需要が大変高かったようです。現在も黒川に残る鉱山跡には、鉄製のトロッコレールや坑道への入り口が見受けられ、1950年代半ば（昭和30年代）頃の燃料革命を迎える少し前までの産業施設の様子を想像することができます。

### <参考：1928年（昭和3年）生まれ、黒川在住 水口元義さん談>

1937年（昭和12年）前後から新たな鉱山を掘る計画が立ち上がり、そこからできた炭鉱が「勝星鉱山」でした。従業員は、鉱夫や運搬担当者、そして事務方も含め20名弱。当時まだ十代前半の水口さんもダイナマイトを仕掛け、鉱山を掘り進めていました。水口さんの母親も、銅と他の岩盤とを選別する「選鉱」と呼ばれる仕事をされていました。ちなみに父親はふたりが働く鉱山の裏山で炭焼きをされていたとのこと。水口さん自身も、鉱山労働と同時に、炭焼き作業を手伝うため、夜中に山中の窯へ見張りにいったこともあったといいます。やはり当時の黒川ではこのように鉱山へ出稼ぎに行く家族もいる傍ら、基本的には炭焼き農家として生計を立てる家々が多かったことが伺えるエピソードです。戦後は鉱山が閉まり、水口さん自身も大阪のガス会社へ就職されました。

### 黒川の銀座

黒川の東側には、兵庫県、大阪府、そして一部京都府にもまたがる能勢妙見山があります。山頂には日蓮宗のお堂（妙見宮）があり、山の中腹の滝では滝行をする参拝者も多かったようで、今も山全体が信仰の対象となっています。開山は鎌倉時代にまで遡るようですが、1920年頃より立ち上がった現在の能勢電鉄と地元の有志の計画で、1925年にケーブルカーが通じるようになると、ケーブルカーの麓は旅館などが軒を連ねるようになり、多くの参拝客で賑わいを見せるようになりました。

現在も当時の面影そのままに3階建ての立派な建物が残る旅館「長谷屋」は妙見山の参拝者が多く泊まった宿のひとつ。他には「大阪屋」「神田屋」といった宿があったそうです。長谷屋には当時の宿帳なども大切に保管されており、各地から妙見信仰の講として団体客や、芸者陣の訪れた記録を確認することができます。

特に兵庫や大阪の商売人たちが、商売の成功を祈願するために訪れた大正・昭和初期は戦前の勢いもあり、修験道としての妙見山だけでなく、レジャーのひとつとして多くの人が訪れていたことがよくわかります。

### 妙見信仰・講

五穀豊穡、商売人、芸人や婦女の信仰対象である妙見大菩薩。妙見信仰を持つ信仰者たちは「講」を成してこの地を訪れました。戦国時代より、日本にはさまざまな民間の信仰をもとにした集団・結社があり、それらは広く「講」と呼ばれています。

宿屋で着替えて、団体で滝に打たれにいく、といったこともよくあったそうです。自営業・商売人は日頃からお金の循環をよくするために縁起物を好むこともあり、そういった人々がこの地を訪れていたことが、記録や当時を知る方のお話の各所に見受けられます。



写真 32. 滝谷駅（現 黒川駅）前



写真 33. 滝谷駅前にあった旅館「長谷屋」

## 2. 昭和までの冠婚葬祭

### 結婚式

かつて、黒川での結婚式は一般的に人前式で執り行われていました。各家に宮司が呼ばれ、女性は白無垢、男性は袴姿で式に臨みます。

仲人も立ち会いのもと各家庭の親戚が集合し、詩吟・舞なども親戚によって披露されていました。

戦後、昭和30年代以降になると徐々に近隣の式場で結婚式が行われるようになったといいます。右の写真は、村から他の地域へお嫁に行く花嫁行列の様子。ここから車に乗って式が行われる町まで出ていったそうです。



写真 34. 花嫁行列

### お葬式（埋葬）

黒川の地域住民が亡くなった際、土葬が行われていました。衛生面などから行政指導が入るようになり次第に土葬の件数は減っていきましたが、昭和60年頃に最後の土葬が行われるまで風習は続いていました。共同の土葬場があり、皆そこへ埋葬されていました。隣組での当番が埋葬のたびに2メートルにもおよぶ穴を掘っていたそうですが、こういった協力体制があったからこそ、地域の結束は強かったそうです。



写真 35. 葬儀



写真 36. 葬列

## 3. 黒川の氏神社・菩提寺と行事

白瀧稲荷神社は、ここ黒川の村の人々の手によって大正末期頃に建立したとされています。氏子は黒川の人のみですが、妙見ケーブルが開通する以前には参拝客が大変多く往来した新滝道に建立したこともあって、ここを訪れる人々のお賽銭により、村の人々の維持費用負担は軽減できていたそうです。しかし現在では氏子の数も少なくなり、また参拝者はケーブルを利用するケースがほとんどとなったこともあり、神社自体の維持が危ぶまれているとされています。

菩提寺である徳林寺の歴史は遡ること江戸時代より続いていると言われ、かつて黒川小学校の前身となる「正則小学校」もこの徳林寺の一部を借りた寺子屋のような場所から始まったとされています。



写真 37. 白瀧稲荷神社



写真 38. 徳林寺

### せがきえ 施餓鬼会

餓鬼や供養をしてもらえない人々へ飲食物を与え、この世の自分たちも幸せになるという考えのもと行う法要。黒川では徳林寺にてお盆の頃に行われます。



### いになめさい 新嘗祭

毎年11月23日、稲作や食物に関わる倉稻魂命と豊受比売命が祀られる白瀧稲荷神社にて神職者や氏子の総代、各氏子が参加し開催される五穀豊穡祈願の祭事。



### しめなわ 注連縄づくり

農家より提供された長く柔らかい乾燥させたもち藁で決められた太さの注連縄を1日がかり合計29本制作。12月29または30日に付け翌年通して社内に飾られます。



## 4. 浄瑠璃の碑

江戸から明治の頃にかけて黒川の人々の娯楽のひとつとして浄瑠璃があったことを伺い知れるのが、地域に残るこの3つの石碑です。黒川のお隣り、大阪府能勢町では民衆芸能として「能勢浄瑠璃」が大阪府無形民俗文化財の指定を受けており、そういった流れの影響も伺え、またこの浄瑠璃で他地域との交流が生まれていたことが見て取れるような、浄瑠璃に関する貴重な石碑です。（資料提供：大阪府文化財愛護推進委員 上山秀雄さん）



### ① 浄瑠璃碑



碑銘：鶴澤喜太郎墓  
建立：明治5年2月  
場所：旧黒川小学校裏山  
太夫名を名乗らず、指導者（師匠）として後継者育成に励んだ喜太郎。同碑の台石には門弟中（13名）の名が刻まれ当時大勢の浄瑠璃同好者がいたとわかる。

### ② 浄瑠璃碑



碑銘：小島弥蔵碑  
建立：明治26年4月18日  
場所：北摂里山街道沿い旧里道  
くずし文字のため、ふた文字目が難解（島と読み下した）。台石に「門弟中」と刻まれている。北摂里山街道沿いの竹やぶの裾に建立されている。

### ③ 浄瑠璃碑



碑銘：竹本文楽碑  
建立：大正9年4月  
場所：能勢妙見山新滝道コース  
中谷直治郎、良太郎の親族が顕彰碑（追善供養）として建立。直治郎は鶴澤喜太郎の弟子で三味線を習い、竹本文太夫・竹本井筒太夫派・竹本中美太夫派いずれかの派に属していた。

## 5. 語り継ぐ黒川

生活になくてはならない資源として里山を使い、多くの人が炭焼き農家として暮らしていた時代を知る人々に当時の様子を伺うなかで出てきたエピソードをいくつかのトピックにまとめました。

### 昭和前半の黒川の様子、どんな記憶がありますか？

この地に最も人が訪れた 1930 年代半ば（昭和 10 年代）。黒川銀座（P.31 参照）の旅館には芸者も多くぼたん鍋などが出され、妙見山の参拝客が白装束でケーブルカーに列を成していた様子は多くの人の記憶に残っています。一方、日常生活をみると、水道が黒川で完備されたのは平成に入ってからで、地域の人々は井戸水も併用する形で暮らしてきました。山からの水も豊富な黒川では日常で使う水は井戸で足りたようで、昭和初期からの里山暮らしで培われた生活の基盤が長きにわたり活用されてきた様子が伺えます。



写真39.1950年台半ば（昭和30年代）の黒川の子どもたち

### 燃料革命の前と後で変わったことは？

1950 年代半ば（昭和 30 年代）以降になってくると、産業界のみならず一般家庭で使われるエネルギーもそれまでの薪炭から、石油、ガス、電気へと徐々に変化し始めました。家族で継いでいく炭焼き仕事が無くなったため、黒川でも大阪の池田方面などへ働きに出る人がぐっと増えたそうです。

### 農業はどのように行われていましたか？

黒川は山間の集落。谷で構成されている土地でもあり実は田んぼは少なめで耕地整理はなされていなかったようですが、それでも人々は炭焼きや鉱山での仕事と並行して稲作や畑仕事を営んできました。黒川公民館の裏手界隈には、段々畑の姿が現在も残っています。農具の機械化が普及し始める以前には各家庭では牛を飼い、村には牛の餌となる草場もあったようです。また、乳牛がいたという話もあり、黒川から近隣の山下の集積所まで持って行っていったとのこと。但馬牛を肥やし、東谷小学校で行われる品評会へ出していた人もいたそうです。



写真40.あぜ道に咲き並ぶヒガンバナ

### 鉱山はどのように使われていたのですか？

川西市や猪名川町の一帯には、50 か所ほどの旧坑跡があります。黒川の周辺は超丹波帯という大変硬い岩盤で成り立っており、黒川付近には 5 つの鉱山があったと言われています。なかでも大谷鉱山や勝星鉱山などでは、鉱石の採取が昭和初期頃まで特に盛んに行われていたようです。鉱脈次第で縦穴を掘ったり横穴を掘ったりと、とても重労働だったそうです。現在は立ち入り禁止となっているものの鉱山とトロッコでの坑道跡が残り、当時に採掘された鉱石や軽石がまだ入り口付近にも見受けられます。



写真41.鉱山跡近くに残るトロッコのレール

### 学校はどこに通っていたの？

この地区で唯一の学校、黒川小学校（P.42 参照）に地域のほとんどの子どもたちが通っていました。戦時中は憲兵や訓練兵がグラウンドでキャッチボールをする姿も見られたという話もあります。黒川小学校を卒業した児童の多くは黒川の隣の地区である東谷中学校へ進学しました。

### 現在の「妙見の森ケーブル」が開通したのはいつ頃？

1925 年（大正 14 年）開通。戦時中の 1944 年（昭和 19 年）に廃止となった後、1960 年（昭和 35 年）に復活しました。廃止から復活までの間、戦争に使う予定だった線路が積まれていた記憶も人々の中に残っています。

### 昔の炭焼きはどうやって行われていたの？

1950 年代半ば（昭和 30 年代）頃までは黒川に 30 軒ほどの炭焼き農家があり、どこの家庭も冬の農業閑散期になると一家総出で山で炭焼きをしていたそうです。今も炭焼き農家として残る今西家（P.40 参照）では、炭出しという焼いた炭を窯から出す日には子どもたちも学校を休み手伝った、というお話も。9 月にはその年にクヌギを切り出す山の入札があり、翌年 5 月の終わり頃まで炭焼きが続きました。かつては山中に窯があり、そこをご近所助け合いの精神のもと共同で使っている場合も多くあったようで、地域の繋がりの深さとも関係していたそうです。



写真42.クヌギ林近くにある炭窯跡

# 6. 黒川の今昔表

## 昔

1920年 (大正9年)

## 今

2017年 (平成29年)

### 黒川の人口

403人

95戸

地域内で働き、小学校があったため住む人が多かった

113人

51戸

若い人が住まなくなり小学校もなくなった

人 = 100人

家 = 10戸

### 家の建て方

1階建

藁葺き 瓦葺き

日本の田舎特有の建築様式

2階建

建築様式の近代化 (瓦、建材、工法)  
個室が必要になった (プライバシー)

### 家族と生活

大家族

祖父母、父母、子、孫と一緒に住んでいた

核家族

同居する家族が少なくなった

### なりわい

自然と共に  
地元で働く

農業、炭焼きで生計を立てていた

兼業農家

地域外で働く場所が増え、会社勤めをしながら農業をする

## 食事

地元の食材を中心とした **和食**

自給自足、米、野菜、魚の干物、鶏肉 (かしわ) など

和・洋・中・他 何でも

外食するところが増え、スーパーで買えば何でも食べられる

## 水と燃料

**井戸と薪炭**

井戸水、きれいな川の水、薪、柴、炭、練炭 (里山資源の活用)

**水道とガスと電気**

インフラの整備 (電気、ガス、灯油)

## 子どもの遊び

**野山で遊ぶ**

自分たちが工夫して身近なものを使い遊んだ

**室内でゲーム**

家の中で遊ぶことができるものが増えた

## 小学校

**地域内に徒歩で通学**

地域に学校が必要となる人数の子供がいた

**電車やタクシーで地域外に通学**

子どもが少なくなったため、地域の小学校は休校  
地域外の小学校に通学

# 7. 暮らしの立て方

昭和の前半に見られた黒川の暮らしの年中行事

月	田んぼ・畑	山・炭焼き	神社	お寺	村・家庭
1		■クヌギ伐採 (~5/8)	■初詣[歳旦祭] (1日)	■お年始会 (1日) ■大般若祈祷会 (20日)	■とんと焼き (15日頃)
2		■炭焼き			
3			■春祭り[祈年祭] (23日)	■祈念祭 (23日)	
4					●道づくり(草刈り)
5	■代掻き (連休明け頃) ■田植え (5/20頃)				
6	■野菜				■ちまき (端午の節句)
7		■下草刈り	■夏祭り[夏越祭] (23日)		
8				■施餓鬼会 (19日)	■地藏盆 (24日)
9	■稲刈り (9/10頃~)		●願祭		●道づくり(草刈り) ●黒川小学校 文化祭・体育祭 ●クヌギ林入札 (23日)
10			■秋祭り[夏越祭] (23日)		
11		■クヌギ伐採 (紅葉が始まってから)	■新嘗祭 (23日)		●ししまい(亥の日)
12		狩猟期間 11月15日 ~2月15日	■注連縄作り		

■今も残る行事 ●今はしていない行事

## とんと焼き

長い竹や藁などでやぐらを組み、正月の松飾りや注連縄を燃やし、残り火で竹に刺した餅を焼き神棚に供え、同時にこの火にあたって焼いた餅を食べるといふ、1年の無病息災・五穀豊穡を祈る伝統行事。現在は黒川公民館のグラウンドで行われています。



## 地藏盆

関西地方では各所で見受けられる地藏盆。お地藏尊をまつる行事です。黒川では、8月末から9月中頃までの八朔会とともに開催されることも。かつては黒川のなかだけでも5~6か所で地藏盆が開催され、盆踊りをはじめすることもあったそうです。



## ちまきづくり

旧の端午の節句に合わせて作るちまき。昔は黒川のどの家でも作っていたそうですが、いま黒川ちまきを作っているのは今西家(P.40-41参照)のみとなっています。

一般的なちまきはササで包みますが、黒川のちまきの特徴は、いまでは大変珍しいナラガシワとヨシの葉を使って作ることにあります。いまでもこのナラガシワとヨシの葉を使ったちまきを作っているのは、武庫川中流域と猪名川上流域の北摂里山地域のみです。



ナラガシワ

モチの材料はうるち米。それを米粉にし、食塩を入れ、モチをつきます。ついたモチを長さ約6~7cm、直径3cm程の俵型にし、ヨシの茎の部分で刺します。ナラガシワの葉と、川に生えているヨシの葉でモチを巻き、田畑で群生するイグサで縛って1本が完成します。それを10本で1束にして、蒸し器で蒸しながらくるんだ葉で香りづけを行います。



ちまき

ナラガシワは昔は黒川一帯に生育し、各家にナラガシワがあったり、炭焼きのクヌギの伐採の時にナラガシワの木を見つけておき、ちまきづくりの際に葉を取りに行くこともあったそうですが、今では数が少なくなってしまいました。今西家では、ちまきを作るために、ナラガシワの木を手入れして守っています。

農機具の機械化が進む以前の一家で農作業をしていた頃は、日中は田植えのため、ちまきづくりは夜にしか時間がなかったそうです。また、他の家から農作業のお手伝いに来てもらった時にちまきを振る舞うこともあったそうです。各家によってちまきの味が違ったそうですが、特に原料に使ったうるち米によって味の違いが出ていたようです。そのため、家の自慢としていいお米でちまきを作っていた家もあったというエピソードもあります。

## 8. 今もなお残る炭焼き（今西家）

黒川が「日本一の里山林」と言われる大きな理由のひとつは、500年以上にわたる歴史を持つ一庫炭（池田炭）を現在にいたるまで生産し続け、この炭の原料であるクヌギが生育年ごとにパッチワーク状の景観を織り成すことにあります。かつてはこの地区のほとんどが一家総出で農業と炭焼きを営んでいましたが、1950年代半ば（昭和30年代）の燃料革命以降はその数も減少し、黒川で炭焼き農家は今西家1軒を残すのみになりました。

### 今西家の炭焼き

現在でも炭焼き農家として営みを続け「菊炭生産家」としての家業を継ぐ、黒川在住の今西学さん。かつて豊臣秀吉が池田の久安寺でお茶会を開いた際に好んで使われたという良質なお茶炭は、今も多くのお茶会の炉でお湯をたてる際に使用されています。毎年11月頃から翌年5月頃までのクヌギ伐採、炭焼き、そして夏の下草刈りも欠かせません。ここでは炭焼きの仕事の流れを見てみましょう。



写真 43. 美しい断面が特徴の菊炭

### 菊炭ができるまで

#### ①伐採



毎年11月末頃からその年に伐採の周期を迎える山に入り、切り出します。またクヌギ以外の周りの木々も手入れとして伐採するため、実際は炭にする倍の量の木を切る。

#### ②玉切り



切り出したクヌギは、炭窯に入れやすいよう寸法を長さ1mに揃える。寸法を揃えた木々は炭窯へ入れる前に十分に乾燥させる必要がある。

#### ③炭出し・窯入れ



寸法を整えた木を窯に積み上げる。一回につき窯に入る原木は5～6トンほど。この作業は毎年12月頃から開始する。

#### ④火入れ



年が明けるといよいよ窯に火をつける。火の加減を見ながら3日間にわたり750度もの熱で燃やし続ける。炭は、もとの木と比較すると5分の1ほどの重さになる。

#### ⑤くど



窯を閉めて酸欠状態にし、窯内の火を鎮火させ、炭を冷却。3日間の火入れの後、この冷却が4～5日ほど行われる。今西家は「くど」と呼ぶが、「くどさし」ともいう。

#### ⑥炭出し



炭を窯から取り出していく作業。くどで冷却したとはいえ窯の中はまだ80度以上。かなりの重労働かつ危険な作業でもある。

こうして今西家では家族総出、従業員も2名雇った上で、1月から5月までの間に③～⑥までの作業を10回ほど繰り返し行います。

### 里山の保全・炭焼きを続けていく意義

かつて黒川でも鉱山の仕事があった時代（P31参照）には金属精錬のためにも燃料として炭が多く必要とされ、また同時にプロパンガス、そして都市ガスが登場する以前には、一般家庭で使用されるエネルギーとしても炭は大きな役割を担っていました。しかし石油、ガス、電気を使用するようになって以降、黒川にかつて戦後の頃まで30軒ほど存在していたという炭焼き農家は消えていったといいます。つまり、地域の人々が街へと働きに出るようになったため、山仕事をする中で自然とサイクルが作られていた里山自体も、保全の方法を見直す必要がでてきている時期といえます。そんな中、家業として炭焼きを継ぐ意志と、現代における炭焼きの技術継承、そして販路の拡大など、今西家では現在も検討を重ね挑戦を続けています。

炭焼きの技術のみならず、原材料となるクヌギを山から切り出すためにはクヌギ林の保全がまず第一。つまり、良質なお茶炭として黒川が誇る「菊炭」をこれからも生産するためには、まず里山林を整備し、良質のクヌギが生育する土地の手入れを続ける必要があるのです。それにはクヌギ林を輪伐し、夏には下草刈りを続け、林を常に若返らすために萌芽再生をさせるサイクルを維持すること。そのことが昔から続く自然の恵みと共存する里山の生活を保全し、ひいては生物多様性を維持することにもつながっているのです。

かつては山中にある共同窯で炭焼きをし、炭にしてから麓へ下ろしていたようで、そういった共同作業のなかで地域の繋がりも深く、黒川の住民の多くが自然と里山の保全に携わっていたようです。「炭」という商品のさらなる可能性を探りながら、今西さんは「菊炭」を支持するお客様を今後も大切にし、里山保全に取り組まれているボランティアの方とも連携しながら里山を使用していきたいと話してくれました。

一方、炭焼きの技術は、たとえば火をつけた段階から火を止めるに至るまでのタイミングをひとつとってもまさに職人技としか言いようのない世界。一朝一夕で習得できる技術では決して無いものの、さまざまな見学者がこの黒川を訪れ、今西さんの先代が作り上げた大きな窯を見て、この先の里山利用についての関心を高めているようです。



写真 44. 煙が出ず香りが良いのでお茶席で好まれる



写真 45. バーベキュー用で使われる菊炭



写真 46. クヌギの切り出し



写真 47. 見学者に炭焼きを説明する今西さん

### お問い合わせ

今西農園（菊炭生産家）  
住所：兵庫県川西市黒川字大上 197  
TEL：072-738-0268  
URL：<http://andalpha.com/imanisi/index.htm>

### 主な用途

お茶席用道具炭（上質菊炭）  
バーベキュー用炭（割れ炭など）  
高級土壌改良用炭 他（粉炭や灰など）

## 9. 黒川小学校 (現 黒川公民館)

黒川の中心部分に位置し、現在は黒川公民館として地域の人々のよりどころとなっている、旧黒川小学校の校舎。兵庫県内でも最古級の木造校舎は趣き溢れる外観とともに、地域外から訪れた人々を迎え入れ、この集落の象徴的な存在といえるでしょう。築110年を超えたこの校舎やかつての黒川小学校の様子、またこの小学校の卒業生であり現在も黒川に住まう方々の証言をもとに、当時の黒川の賑わいを振り返ってみます。



写真 48. 旧黒川小学校校舎

### 子どもたちの学びの場

黒川小学校が開校したのは1873年(明治6年)のこと。当時は地域の菩提寺である徳林寺の一部を借り「正則小学校」として発足、教員は1名、児童は男子9名、女子7名の計16名だったと記録に残っています。その2年後には新築の校舎が建設。当時の川西市には「川西」「多田」「東谷」という3つの村があり、それぞれ一村一校が原則でしたが、黒川尋常小学校は地域の関係で独立の学校として1892年(明治25年)に認められました。

現存するのは斜面に沿って建つ「北校舎」と「南校舎」のふたつで、北校舎は1904年(明治37年)8月25日に、南校舎は1946年(昭和21年)12月27日に落成。特に南校舎については第二次世界大戦の終わり頃から終戦直後の混乱期に近隣都市からの疎開児童が多く入学してきたことで、一気に増えた児童のために増築されたもの。当時は複式学級だったそうで、ピーク時には男子60名、女子49名の合計109名もの児童がこの校舎で学びました。

その後、若い世代の働き方が里山の仕事から都市部での仕事に移り変わり、一庫ダムの建設に伴って徐々に児童数は減少し、1977年(昭和52年)4月より休校しています。建物は現在までほぼ当時のままで残されており、各教室をはじめ、北棟と南棟の間の通路や便所にいたるまで当時の小学校の生活様式を知ることができるとても貴重な建築物です。



写真 49. 児童数が一番多かった昭和20年の卒業生(総児童数109名)



写真 50. 運動会

### 黒川小学校から黒川公民館に

休校を迎えた1977年からの40年以上にわたり、黒川公民館として使用されるようになった旧小学校は、現在ではさまざまな地域の行事、お祭りの際にも使用され、毎年1月の「とんと焼き」では近隣地域の住民も一堂に会しグラウンドも利用する形で行事が執り行われています。また、地域住民が参加する文化祭や体育祭が黒川小学校卒業生を中心にグラウンドでも開催されていたそうです。2009年度には兵庫県より「景観形成重要建造物」の指定を受けた黒川小学校の貴重な校舎建築。地域の中心としてこの先も重要な役割を果たしていくことでしよう。

### のせでんアートライン

能勢電鉄沿線の里山地域全体をワークショップ会場として利用する「のせでんアートライン」は2013年より開催されている芸術祭。夏から秋にかけてアーティストが様々な企画を地域に入っていきますが、その集大成となる秋の「収穫祭」では黒川公民館で制作発表や展示が開催されています。

### 黒川公民館 開館日・アクセス

住所：兵庫県川西市黒川字谷垣内295 TEL：072-738-0107  
開館時間：午前9時～午後5時30分 休館日：12月29日～1月3日(※都合により臨時休館あり)  
アクセス：能勢電鉄「妙見口駅」下車 阪急バス「黒川」下車 徒歩5分

## 10. 里山体験学習

### 川西市における体験学習の意義

現在、兵庫県内の小学校では県の事業である体験教育の一環として小学校3年生の環境体験事業と5年生の自然学校事業という学習プログラムが組まれています。これは学習の場を普段の教室から自然の中へと移し、人・自然・地域社会と触れ合うことで命の大切さを学んでいく機会となっています。これに加え、2009年度には川西市の小学校全16校で小学4年次に日本一の里山を有する川西市独自の事業として黒川を舞台とした「里山体験事業」が行われるようになりました。ここで児童たちは、この土地ならではの学習といえるような、黒川とその周辺地域・能勢や北摂里山エリアまで含めて、里山の自然・文化・人の繋がりなどを学んでいます。



写真 51. 里山体験学習開校式

### 体験内容

上記のように川西市では他の市町にはない、小学4年生の「里山体験学習」があり、3年生と5年生での体験学習の連続化も図られ“出会い・ふれあい・支え合う”“ふるさと川西を愛し、誇りに思う心を育てる”連続的・体系的な体験学習を目標として実施されています。黒川に住む子どもは減少の一途ではありますが、川西全域から子どもたちに黒川を訪れてもらうことで、豊かな自然で心を育み、いずれはこのふるさとの価値をどのように残すのかを考えてもらえれば、という思いも込められています。

実際のプログラムとしては

- ・黒川の歴史・文化の講話
  - ・里山散策、しめ縄づくり・芋掘り・干し柿づくり
  - ・里山保全の知見を得るための、国崎クリーンセンターおよび一庫ダムの見学
  - ・山の木々を利用した木工クラフト体験
  - ・昔話の紙芝居
  - ・旧黒川小学校の校舎見学
- などが主に行われています。

地域住民を筆頭に、一庫公園、国崎クリーンセンター、知明湖キャンプ場、黒川公民館、川西里山クラブ、菊炭友の会などの協力のもと、2007年から現在に至るまで、児童たちが毎年この黒川を訪れて日本一の里山の恵みに触れています。

この地域に残る里山文化やそれに関連する年中行事(P.38参照)が体験プログラムに組み込まれることもあり、川西市の小学生は黒川でそれぞれ自然のなかに宝物を見つけ、体験として持ち帰ります。



写真 52. 地域講話



写真 53. いも掘り体験



写真 54. 里山散策

### 里山体験学習に協力している団体

黒川地区住民、知明湖キャンプ場、黒川公民館、一庫公園(川西市国崎字知明1-6)  
国崎クリーンセンター(川西市国崎字小路13番地)他、川西里山クラブと菊炭友の会についてはP.44参照

## 11、黒川を守る活動

川西市黒川は2009年(平成20年)に公益財団法人「森林文化協会」による「にほんの里100選」に選ばれて以降、歴史性、文化性、生物多様性などの見地から「日本一の里山」と呼ばれるようになりました。地域住民の他にも有志団体が交流して活動し、この貴重な里山を未来へ残す取り組みを始めています。

### 黒川でのボランティア団体の存在

貴重な里山資源を再発見し、保全を行うボランティア団体が黒川で活動しています。2001年から黒川で活動を開始した「ひょうご森の倶楽部」は放置されたクヌギ林再生のため、植樹や下草刈りを猪名川町も含めた広域エリアで展開。

「菊炭」の原料となるクヌギを中心とした里山林の再生・整備や炭焼き、エドヒガンの保護などを行う「菊炭友の会」。

川西市主催森林ボランティア養成講座の卒業生が里山の保全を目的に活動し始め、活動中にエドヒガンがこの地にあることを発見した「川西里山クラブ」。

古くから能勢妙見山の境内にあったことで守られてきたブナやアカカシの原生林を守り、学ぶ「能勢妙見山ブナ守の会」。

そして黒川の里山風景を現代に甦らせ、子ども達の遊べるフィールドを再建しようとしている「身近な自然とまちを考える会」など活動もさまざまです。

それぞれが地域住民との連携を深め、里山林の保全、またエドヒガンなどの観光資源をどう活かすか、黒川の今後について話し合う必要性は、今後より一層高まりそうです。



写真 55. NPO 法人  
ひょうご森の倶楽部



写真 56. 菊炭友の会



写真 57. 川西里山クラブ



写真 58. 能勢妙見山ブナ守の会

### トンボ池

かつて里山に生息した生物に再び戻ってきてもらおうと、休耕田を再活用しているフィールド。トンボ、昆虫、魚、水生生物が確認されています。



身近な自然とまちを考える会が護っている

### 主なボランティア団体

#### NPO 法人 ひょうご森の倶楽部

■住所：兵庫県神戸市中央区中山手通 4-1-11 山手ユージハウス 201 ■TEL・FAX：078-321-0049 ■URL：http://hyogo-morinoclub.jp/  
■主な活動場所：徳林寺周辺等、猪名川町内馬場、および兵庫県各地

#### 菊炭友の会

■住所：兵庫県川西市大和東 1-93-9 ■TEL：090-3970-6688 ■FAX：072-733-2026 ■E-MAIL：nak@yo.rim.or.jp  
■URL：http://kikuzumi.exblog.jp ■担当：中川彰 ■主な活動場所：黒川 桜の森

#### 川西里山クラブ

■住所：兵庫県川西市大和東 1-14-7 ■TEL・FAX：072-794-3203 ■E-MAIL：ppkj90364@maia.eonet.ne.jp  
■URL：www.hitosato.com/kawanishi\_satoyama\_club/index.html ■担当：辻本哲 ■主な活動場所：妙見の森

#### 身近な自然とまちを考える会

■住所：兵庫県川西市湯山台 1-29-13 ■TEL・FAX：072-774-3515 ■E-MAIL：ishizu-akiy@jttk.zaq.ne.jp ■担当：石津容子  
■主な活動場所：猪名川流域、黒川、トンボ池など

#### 能勢妙見山ブナ守の会

■住所：大阪府豊能郡能勢町野間中661 能勢妙見山内 ■TEL：072-739-0991 ■FAX：072-739-2883 ■URL：http://bunamori.org/  
■主な活動場所：能勢妙見山の境内にあるブナ林とその周辺区域

## 12、黒川のこれから

このガイドブックでは、黒川の歴史から現在の里山保全活動に至るまで、さまざまな側面をたどってきました。かつては炭という燃料を生産することが多くの黒川の人々にとって生業であり山々が常に使われていたからこそ、里山には多くの意味がありました。そして今は都市に暮らす人々が、自然と触れ合い、学ぶための場としても、この黒川に魅力を見いだしはじめています。この通り、里山に見出される価値というのは時代とともに変化していくものであることがわかります。また、炭焼き農家が減少しクヌギをはじめとした里山林は使用されることがなく、里山保全が第一目的となってしまうと、既に人口減少と高齢化率上昇という課題に直面する黒川の住民だけでこの責務を背負いきることは困難ともいえるでしょう。

エドヒガン(桜)の名所であり、新緑や紅葉の時期の黒川で楽しむ山々の景観は大変美しく、観光で訪れる価値のある場所となっています。また同時に「菊炭」という日本文化を後世に残すことや、里山だからこそその生物多様性を維持するためにも、常日頃から黒川との交流を持つ人々がどれだけ増えていくか。これが、黒川のこれからのために重要なこととなるのは確かです。

この土地の持つ固有の価値を守り高めていこうと、すでにこの「日本一の里山」と呼ばれるようになった黒川に多くの専門家やボランティアが関わってきていることは、このガイドブックの中でも紹介してきました。また、そういったボランティア人材を育成する取り組みとして「北摂里山大学」も開催されており、知明湖キャンプ場や黒川ダリヤ園も、新たに外から人々に訪れてもらうきっかけのフィールドとなっているようです。近年は近畿大学のゼミナール生たちの手で試験的に黒川の民家を借りての「里山カフェ」が開かれたり、菊炭生産家の今西家には炭焼きの見学や、その技術を習得するべく働きに来ている人もいます。

また同じく本書で紹介した川西市の小学生に向けた里山体験学習のように、日本一の里山をまずは訪れてもらい、外からの人々が感じ取るものを住民側が受け取るという流れは、今後さらに重要視されることでしょうか。かつて90年代は黒川の玄関口に産業廃棄物が山積み景観を損ねていましたが、この地の美しさを再生させるべく住民と行政の協力で廃棄物を撤去。その跡地に2013年誕生した黒川駐車場や、里山の魅力を発信すべく始まった「黒川里山まつり」などは、地域住民側の大きな動きでもあります。2012年には里山の恵みを自然出産という形で活かしていこうと、移住者である島崎助産師により「しまぎ助産院」が開業しました。こういった新しい活動は今後も注目されます。こうしてひとり、またひとりと黒川での活動を始める人が少しずつ増え、活動を始めた人同士や、外と内の間での交流も生まれてこそ、未来の黒川を語ることや担い手の育成が少しずつ可能になっていくはずで

### しまぎ助産院

家族と移住した島崎さんが開いた助産院は自然と共存する出産の場をつくり、ここで産まれた子どもが再び里山へ遊びにくる循環を生もうとしている。



写真 59. 知明湖キャンプ



写真 60. 黒川ダリヤ園



写真 61. 黒川里山まつり



写真 62. 黒川駐車場



写真 63. 北摂里山大学



写真 64. 里山カフェ

# 13、黒川の概略年表

和暦	西暦	黒川の出来事	黒川周辺の社会状況	出典・確認元
----	----	--------	-----------	--------

## ■古代～中世

天禄元年	968年		源満仲が家臣を率いて多田に入る 970年には多田院を建立	
長暦元年	1037年		摂津国能勢郡より初めて朝廷に銅を献上	『百鍊抄』
嘉禎4年	1238年		多田院御家人の制度が始まる	川西市史(以降市史)第1巻P.377
文和4年	1355年	徳林寺境内に石造宝篋印塔建立 (文和4年10月20日銘)		
永和元年	1375年	『諸堂造宮棟別郷村注文』に「黒河」の文字(文献上最初)。多田院諸堂造宮料を「保野谷 横大路 黒河 頸崎」も負担		市史第4巻P.356～358

## ■織豊政権時代

文禄3年	1594年	黒川村で検地が行われ、「検地帳」が作られる。村高187石余(黒川地区に残る最古の古文書)		文禄3年(1594)9月『摂津国河辺郡多田庄黒川村御検地帳』(黒川の古文書)
慶長年間	1596年～1619年		一庫村に炭釜4つ、土地は年貢免除地とされる	延宝7年(1679)『一庫村検地帳』(市史第2巻P.57-59)

## ■江戸時代

正保2年	1645年		「毛吹草」に一庫炭の名あり。初見	
寛文年間	1661-72年	黒川村、銀山付村に編入される	多田銀銅山出銅高、最高を記録	市史第2巻138-150ページ
延宝7年	1679年	『延宝検地帳』が作成される。桐山・柴山・草山が明示され、毎年山手米が徴収される		『摂津国川辺郡黒川村検地帳』市史第5巻P.26～30
貞享3年	1686年		「雍州府志」に池田・一庫の産地(切炭)と記載	
元禄10年	1697年		「本朝食鑑」に池田・一庫炭が第一だと記載	
享保7年	1722年	寺社書上帳に、「右八幡宮川辺郡黒川村も氏子にて神事も一所にて御座候」「社修履黒川村と当村と申し仕候」とある		『寺社書上帳』(『吉川村史』)
文政12年	1829年	「上炭」「諸炭」の売り捌き商の選定に関し、関係9ヶ村が盟約		『村々約定一札』(黒川の古文書)
天保元年	1830年	同上につきさらに盟約	山方村々で従来の池田炭屋仲間を通さず、大坂の薩摩屋佐助一手に炭荷物を出荷することにした	『焼炭一条ニ付村中連判帳』(黒川の古文書)
3年	1832年	打撃を受けた池田炭屋仲間と和解		市史第2巻P.468～471
10年	1839年	大津代官所に出された嘆願書に黒川村で銅気の害が問題とあり		市史第2巻P.463

## ■近代

慶応4年	1868年	黒川、高槻藩預かりとなる	戊辰戦争 明治政府の確立へ	
明治3年	1870年	黒川、兵庫県の管轄となる		
5年	1872年	桐木山・柴山・草山を個人名義にし、区分した土地ごとに36人(うち1人は女性名前)の者に分割		『山林名寄帳』(黒川の古文書)
6年	1873年	黒川小学校の前身、徳林寺に寺子屋として発足	甘露寺に兵庫県河辺郡山下小学校設立	『黒川小学校百周年記念誌』
7年	1874年	黒川村でこの年の炭の生産が記録される(炭2万4000貫、上炭400駄、雑炭350駄。2万4000貫とは9万kg。仮に40軒で焼いたとして一軒当たり600貫(2250kg))		『産物惣書上控 黒川村』(黒川の古文書)
11年	1878年	徳林寺の寺子屋、山下小学校と合併、智囊小学校黒川分校となる		『黒川小学校百周年記念誌』
20年	1887年	智囊小学校黒川分校、黒川簡易小学校と改称		『黒川小学校百周年記念誌』
22年	1889年	東谷村にが発足。黒川も所属		
25年	1892年	黒川簡易小学校、黒川尋常小学校に改称		『黒川小学校百周年記念誌』

和暦	西暦	黒川の出来事	黒川周辺の社会状況	出典・確認元
27年	1894年		日清戦争(～1895)	
37年	1904年	黒川小学校(北校舎)を竣工し、移転	日露戦争(～1905)	『黒川小学校百周年記念誌』

大正2年	1913年		能勢電気軌道、川西能勢口～一の鳥居間6.4kmの運転開始	能勢電鉄(WEB)参照(*1)
5年	1916年	白瀧稲荷神社が現在の地に鎮座し、白瀧神社は白瀧稲荷神社となる		兵庫県神社庁(WEB)参照(*2)
14年	1925年	妙見鋼索鉄道が下部線滝谷～中間、上部線中間～妙見山で開業		『地方鉄道運輸開始』『官報』1925年8月10日

昭和12年	1937年		日中戦争始まる	
13年	1938年	阪神大水害。黒川の石灯籠流される(7月3日～5日)		
16年	1941年	国民学校令により、東谷村立黒川国民学校となる	太平洋戦争始まる	『黒川小学校百周年記念誌』
20年	1945年	黒川小学校の児童数がピーク(109人)	終戦	
22年	1947年	学制改革により、東谷村立黒川小学校となる 南校舎増築		
25年	1950年		全国の木炭生産量年間約200万トン	
29年	1954年	川西市制施行により、川西市立黒川小学校となる	川西町、多田村、東谷村合併により川西市が誕生 人口3万3,741人	『黒川小学校百周年記念誌』
30年代			家庭の燃料革命が始まる	
30年	1955年	大谷鉱山 閉山		
35年	1960年	能勢電気軌道(現在の能勢電鉄)が、鋼索線の黒川一山上間を再開業(4月22日)、索道線はふれあい広場一妙見山間を開業(8月27日)		
43年	1968年	徳林寺宝篋印塔 市文化財指定		
45年	1970年		全国の木炭生産量 約28万トン	
48年	1973年		日本鉱業多田鉱業所、閉山	
50年	1975年	黒川小学校創立100周年		
52年	1977年	黒川小学校休校(3月31日)		
55年	1980年		全国の木炭生産量 約7万トン	
58年	1983年	一庫ダム完成		
60年	1985年	黒川キャンプ場オープン		

平成10年	1998年	身近な自然とまちを考える会発足		
13年	2001年	ひょうご森の倶楽部が黒川で活動開始		
17年	2005年	菊炭友の会、川西里山クラブ発足 黒川ダリヤ園開園		
20年	2008年	黒川地区、にほんの里100選に認定		
21年	2009年	黒川公民館、兵庫県指定景観形成重要建造物指定		
23年	2011年	エドヒガン群落(妙見の森) 川西市文化財指定		
25年	2013年	黒川駐車場オープン		
26年	2014年	台場クヌギ林 林業遺産認定 能勢妙見山ブナ守の会発足		
28年	2016年	黒川宇奥山ブナ群落(妙見山のブナ林) 川西市文化財指定		
29年	2017年	黒川宇奥瀧谷台場クヌギ群落 川西市文化財指定		

\*1: 能勢電鉄(WEB) <http://noseden.hankyu.co.jp/company/chronicle01.html>  
\*2: 兵庫県神社庁(WEB) <http://www.hyogo-jinjacho.com/data/6305040.html>